
哀ちゃん最良な短編集

こつぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀ちゃん最良な短編集

【Nコード】

N5613L

【作者名】

こつぶ

【あらすじ】

Candlelightの拍手作品をこちらに置いときます。といっても、2作品しかないなので、気が向いたら少しずつ。哀ちゃん（志保さん）最良な、普段あたしが書いている短編小説よりかなり短い短編小説です。多分、中学生未満な、哀ちゃんを中心にした話を書くと思います。

夏の風物詩

ドン、と花火の音が聴こえた。

始まったのだ。

私たちはその音につられ、早足で階段を上っていく。

小学校最後の夏。

灰原哀最後の夏。

夏休みが明ければ、私は灰原哀とは違う人間になる。

この時を待ちわびていたはずだった。

長い、6年間だった。

宮野志保にとっては。

けど、あっという間の6年だった。

灰原哀にとっては。

子どもたちと一緒にいて、どれだけ濃い時間を過ごしてきたのだろう。

どれだけ、救われたのだろう。

彼らといくと、黒い汚れを洗い流してくれるような、そんな気持ちになる。

このままでもいい。

けど、私は、『宮野志保』なのだ。

今までしてきた『宮野志保』としての罪を、生涯かけて償わなくてはいけない。

だから、飲むことを選んだ。

愛する人が待つ工藤くんとは違う。

私が歩くのは茨の道。一生裸足で踏み続けなくてはいけない道。

だから、今を楽しむのだ。

この一瞬一瞬を胸に焼き付けるのだ。

たとえば、『宮野志保』になって、この子たちと関わることができなくなったとしても。

春になれば、花見に行ったことを思い出し、
夏になれば、夏祭りやキャンプに行ったことを思い出し、
秋になれば、紅葉狩りや松茸狩りに行ったことを思い出し、
冬になれば、スキーや初詣に行ったことを思い出し、

そうして1年1年大きくなった彼らを想像しながら生きていくのだろう。

私たち以外誰もいない廊下をただひたすら走る。

今頃用務員さんはお酒を飲んで、泥酔しているから見回りに来ないことはわかってるけど。

もう、既に花火は始まっている。

逸る気持ちはなんだろう。いそがなきゃという思いは何だろう。

本来ならば入ってはいけない場所に入っているという背徳感？
早く気づかれる前に屋上へ上がりたいとく気持ちからなのだろうか。

それとも、ただ、花火大会を少しでも早く目に焼き付けたいだけなのだろうか。

「キャッ！」

急く気持ち先走り、珍しくも足が纏れ、転倒してしまった。

「哀ちゃんっ、だいじょうぶ？」

「何やってんだよ、オメー、大丈夫か？」

「だ、大丈夫ですかっ！怪我してないですかっ？」

3つの手が目の前に差し出され、私はへたりと座り込んだまま、ぼんやりとその手を見つめていた。

灰原哀のままで見るその手は、大きく見えるその手も、きつと元の体に戻ったら、きつと

まだまだ子どもの手で、小さく感じてしまうのだろう。

宮野志保になっても、この子たちと繋がっていけるだろうか。

茨の道を、白く純白な、絹のような道に変えてしまうことはいけないことなのだろうか。

「ごめんなさい。大丈夫。先、進みましょう」

3つの手を同時に掴むことはできないので、私は勿論吉田さんの手をとる。

白くて白魚のような手。

この子は、本当に綺麗な女性になる。そうして、心の中も、いつまでも綺麗で、真っ白なのだろう。

まるで、工藤くんを待つ幼馴染のあの人のように。

円谷くんも、きっと聡明な人になる。工藤くんに負けないような大人に成長するような

気がする。弁護士や学者、教師、それとも探偵。

どれも似合いそうで、でも案外まじめなサラリーマンになってたりして。

小嶋くんも、食いしん坊で大雑把だけど、情の厚い人。

人がよくて、実は心が優しい彼は、きっとモテると思う。

まだ、彼のことを周りが知らないだけ。大人になったら酒屋の主人かしら。

「なあに？ まじまじ私たちのこと見てえ」

「何かついてますか？」

「改めて男前だと思ったのか？」

「…そうね、そんなところ」

「……心にもないこと、言うなよ…そこまでバカじゃねーぞ、俺」

カン、カン、カン、カン。

屋上のドアを開ける。

大きく咲く、夜の花。
1 輪、2 輪。

そして、そこでただ一人、夜空を見上げているのは――

「おせーぞ、オメーら」

甚平姿のメガネの彼が、ニカッと笑った。

大輪の花をバッグに、逆光に光る彼の姿は憎たらしいほど様にな
っていて、

後ろの吉田さんは頬をぽっと染めていて。

灰原哀、最後の夏、

5人で過ごす、最後の夏、

この日を、この夏を、

私は一生、忘れない。

インフルエンザ。

ピピピ、というケータイのアラームの音がかすかに聞こえる。

起きなきゃ。

起きなきゃ。

起きなきゃ。

けれど、体が動かない。

どうやら、風邪を引いたらしい。

頭が痛い。喉が渴くが、体が重い。

ごほ、ごほと咳をする。昨日までは元気だった。小学校でインフルエンザが流行り始めていたが、自分も感染してしまったのだろうか。博士は、ちょうど昨日の夜から海外へ、旧友の新作発表会とやらで出掛けてしまって、家にいないというのに。

水が欲しい、水が・・・。

頭が痛い。

「おねー・・・ちゃん」

ハアハアとあえぎながら姉の名前を呼ぶ。こんなんじや自分は死にはしない。けど、それでも具合が悪くなると誰かに助けを呼びたくなる。幽霊でも、幻でも、お姉ちゃんに会いたくて。

私は、バッグからケータイを手に取った。それから、震える手でリダイアルボタンを探す。一番下の方だけれども、まだ残っている名前。

『お姉ちゃん』

何ヶ月も前なのに、なおも表示され続けている姉の名前。メールはするけど、子どもたちとは家の電話だし、この姿ではケータイで電話しあうことは少なくなったから、消えることはないのだろうけども。生身の声とは繋がらないとはわかっていのに。表示に残る姉の名前を見て、思わず笑みがこぼれる。

そうして、リダイアルボタンを押した。今はもうない、姉のケータイ。

T r t r r r r t r r r r

はっとする。誰かに、繋がった。

t r r r r . . . t r r r r . . . t r r r r r . . .

ガチャ

誰かの取る音が聴こえた。
これはすべて、幻聴だろうか。それとも、天国に繋がったの
だろうか。

「おねー．．．ちゃん？．．．私．．．志保．．．よ．．．ねー．
」

おねえちゃん。
おねえちゃん。
おねえちゃん。

『．．．ら？．．．．．』

電話の向こうで誰かの声がした。繋がったのだ。思わず目を真開いた。意識もすつと元に戻った気がした。

おねえちゃんの声だろうか。おねえちゃんの声だと思いたい。

しかし、起き上がって電話を握り締めた瞬間、またくらくらとした眩暈が襲って、だんだんと視界がフェードアウトしていき、バタリと再びベッドの上に寝転んだ。

そうして、その主が誰なのか確認することができないまま、再び意識が飛んでいった。

★★★

ぴたり。とつめたい何かが頭に乘せられて、私は目が覚める。
タオル、だろうか。・・・そうだ、私は風邪を引いたようで・

「起きた？」

その声に、目を開けるとにっこり、その人物が笑っていた。
自分が会いたかった人物。それは、勿論。

「お姉ちゃん!？」

「何よ、突然。・・・どうしたの？お化けでも見たような顔して。悪い夢でも見たの？」

カラカラと笑いながら、姉は水の入った洗面器を持って立ち上がり、奥へ消えていった。

ここは、どこだろう。見慣れない・・・多分、ここはビジネスホテル。

そうして自分は、灰原哀じゃなくて、宮野志保。

「どうして・・・」

「どうして、って。貴方何も覚えてないのね。久しぶりに会うのを楽しみにして二人で、今日はどこにしようかなんて話していたら、貴方突然咳き込むから・・・。おでこ当ててみたらすごい熱。だからとホテルで休もうなんて話になったんじゃない。私の家には連れて帰るわけにも行かないし、病院も行くのをすごく拒んだじゃない。組織に連れ戻されるだなんて言って」

「ああ、・・・そうだった、かしら」

今まで見ていたのは夢だったのかしら。と私は思った。

嫌で嫌でたまらなかった組織を裏切り、小学1年生の姿になって、自分の葉のせいで小さくなった高校生名探偵やその仲間と戦うなんて、そんなことを自分はするわけがない。組織は怖い。裏切ったらどうなるかわかっている。それを承知で抜け出して戦おうとしているなんて。

しかし、それより何より、目の前の姉が自分を守るために組織に吹聴され、悪に身を染め、

結果、組織によって殺されるなんて。

あつてはならないこと。

そう、自分は、悪い夢を見ていたんだわ——

「ねえ、志保。貴方がんばりすぎよ。・・・本当に、無理してるんじゃないの？美味しいもの、食べてる？熱なんて出しちゃって。組織で何頼まれてるのか知らないけど、できないことはできないって言っているのよ」

「・・・言いたいけど、・・・それを拒めば、私、殺されるわ。わかっていてでしょ？」

「・・・そう、ね」

顎に手を当てて、姉は少し間を置いてから私の言葉を認めた。その表情が私は気になって、補足した。

「・・・でも、今の現状を、苦痛だと思ってはいないわ。組織では幸い私を必要としてくれているようだから、比較的快適な暮らしをしているのよ。監視の目はわずらわしいけれど、子どものころはアメリカにいて会えなかったお姉ちゃんとも、今じゃこうして」

「志保」

「それに、研究って私好きよ？」

「志保！」

「大丈夫。・・・無理なんてしてないわ、私は。・・・だから」

だから。

「私を助けようなんて思わないで。私は平気、だから。・・・体を張って組織から私を助けようだなんて。・・・わかってるでしょ？私はおねえちゃんがなくなったなら一人なのよ？」

わかってる。あれは夢。

でも、どうして胸騒ぎがするんだろう。目の前のおねえちゃんの顔が一瞬蒼ざめたような気がした。

「そうね、でも・・・」

「私はお姉ちゃんとずっと一緒にいたい」

「それは志保、私も同じよ、だからこうして」

「おねえちゃんが死んだら嫌なの。・・・わかるでしょ！？お姉ちゃんは絶対組織にこれ以上近づいちゃだめなの。普通の生活を送ってほしいの。私ができなかったことを、お姉ちゃんに」

勢いで苦しくなって、ゴホゴホと咳こんだ。

「志保！」

あわててお姉ちゃんが背中をさすってくれる。

「ほら、また熱上がっちゃうわよ。バカね・・・」

優しいお姉ちゃんの声。

「いつかは、組織は倒されるわ」

ポツリ、お姉ちゃんが言葉を続けた。けど、興奮したせいで意識がだいぶ遠のいている気がした。

お姉ちゃんの声が遠くでエコーがかかったように響いている。

「でも、いつかじゃなくて、明日にでも貴方を救いたい。少しでも早くあの人たちから離れた生活を送ってもらいたい。普通の生活をしてほしい。今、生きている貴方のその生活は尋常じゃないわ。だから、助けたいの。それだけはわかってほしい。だって、志保は、あなたの大切な妹だから」

また、言ってる。

「大丈夫、死なないわ。・・・だって、私のもう一人の大切な人、あなたにちゃんと紹介してないもの」

だんだんと遠くなるお姉ちゃんの声。それでも私は聞き逃すことのしなかった。

最後の最後まで考え続ける。

大切な、人？

ああ。確か、以前事故で間違えて轢いちゃったっていう――

お姉ちゃんの人。

それは、私よりも大切？

ねえ、お姉ちゃん……？？

★★★

ひとり、と冷たい何かが頭に被さった。
タオルだ。

お姉ちゃんがまた代えてくれたのだろうか。
今は何時だろうか。もう、組織に帰らなくてはいけない時間だろうか。

それとも、気がつけば組織の中の病室の中なのだろうか。

不安な気持ちで目を開けると、そこには小学1年生ほどのめがねの少年がいた。

「よ、灰原」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
「・・・・・・・・・・・・・・・・くん」

はっと我に返り、がばっと体を起こす。

自分の体は、宮野志保ではない、灰原哀だ。そしてここは居候先の阿笠博士の家で、彼と兼用の寝室だ。

そして目の前にいるのは、自分が作った薬によって小さくさせられた被験者の彼。

『江戸川コナン』になった高校生探偵。

あれが、すべて夢だったのか。

再び力が抜け、ばふりとそのままベッドに倒れこんだ。

「ずいぶん汗かいてたぞ、部屋、出てくから着替えれば」

オレンジ色の子ども用のパジャマ。新品だ。

「これ・・・」

「ああ、蘭が持ってけって。この前オメー熱出したときに買って
おいたんだけど、渡しそびれたとかで、家にあっただと」

「そう、ありがとう。シャワー浴びてから着替えさせてもらうわ」

受け取り、彼を素通りして廊下から、階段へ向かおうとするが、
ふらついてしまい、思わず手すりを掴む。

「おい、だいじょぶかよ」

「平気よ・・・」

「・・・何してんだよ・・・負ぶってやるよ、あぶなっかしーか
ら」

「いいわよ」

「バーロ。見てられねーんだよ」

そういうと、よいしょとおぶられ、1歩1歩歩きだした。彼の
背中は小さくて、自分とそんなに体重も変わらないというのに。

「重いわよ」

「ホントにな」

殴りたくなるけど、そんな力もなく。くたっとなって、彼の背
中に頭を預けた。

一步一步慎重に階下に下りていく。おぶられているこっちだってひやひやしているのも、わかってほしい。

「・・・で？なんで、ここにいるの？」

「なんで、ってオメー、電話しただろ？オレに」

「え？」

「あー・・・正確には、明美さん、か。どうやらねーちゃんにかけるつもりが、オレにかけちゃったみてーだな」

「・・・そう」

そうか、だから繋がったのか、と思った。

天国に電話は繋がるわけがない。

「胸騒ぎがして、飛んでみればぐったりしてるオメー見つけて、
・明美さんの名前呼んでるおめー見たときにはびっくりしたよ。
博士帰ってきてオメーが肺炎とか脳炎とか起こしておっ死んでたら、
きつと発狂してたぞ？」

「そう、ごめんなさいね・・・」

「・・・別にいいけど。オメーが明美さんのことを誰より好きだってことはわかる。わかるけど、こういうときは・・・。オレらも頼れよ」

「え？」

「オメーを思っているのは、明美さんだけじゃねーんだからよ」

ドキリ、と胸が高鳴った。おぶさられていたから、彼の顔がどうなっているのかはわからないが。きつと、深い意味はないのだろうけれど、どうしてこんなに嬉しいのだろうか。心が、温かいのだろうか。

「いつでもいける場所にいるのに、知らずにいたら。それこそ明

美さんに恨まれちまう」

「そう、ね」

「おめーが間違えて俺にかけてくれてよかったよ。まさか昨日あんなに元気だったオメーがそんな苦しそうにしているなんて思ってもなかったからさ。朝のモーニングコールがそれで、オレの眠気がすぐにふっとんじまったんだぜ？」

「えっ」

そういえば、と時計を見る。今はもう10時を過ぎていた。

「あなた、学校は？」

「あー。・・・そういやそうだったな。オメーの様子見てから学校行こうと思ってたけど、もうこんな時間か・・・ま、しゃーねーわな」

いたずらボウズっぽく笑う背中越しの彼の声に、私は思わず「呆れた」と呟いた。

私のためなんかになんかことなんてして。

「子どもたち、心配してるわよ」

「オレも来ないし、オメーもその様子じゃ学校に連絡してねーだろうしな。二人して無断欠席かって？」

「そう」

「光彦なんか、ヤツのことだからまた変な妄想でも膨らませてんじゃないか？」

あいつも激しいヤツだよな、とブツブツ呟きながら、彼は私をよっと背負いなおした。

大好きなお姉ちゃんが殺されて、自暴自棄になって組織を裏切り、クスリを飲んで。

死んでお姉ちゃんに会えると思ったら、子どもの姿になってまで生かされて。

地獄を生きている、これは罪を償いきるまで生きなさいという神からの命令なのかもだなんて、絶望を感じて生きてきた。

でも、

まさかこんな世界があるだなんて思わなくて。

こんな人生を送れるとは思わなくて。

お姉ちゃんが身を挺してまで願ひ続けた私の『普通の生活』。

それは、まだもうちょっと先のことなのかもしれないけど、少しずつ近づいているから。

本当は、お姉ちゃんともこの普通の生活を一緒にしていきたいかったけど。

それでも、感謝してるんだよ。

シャワー室の前まで連れてこられると、彼は私を降ろし、リビングの奥へ消えていった。

どうやら今日は博士の代わりにずっと傍にいるつもりらしい。

相変わらずの優しさ。嬉しいと認めてしまうと、また変な気持ちかわきそうで。

いけないと思い、私は軽く頬をペチリと叩いた。

そうして徐にポケットからケータイを出して。

私は、また、お姉ちゃんに向けて電話をかけてみる。
リダイヤルボタンを押して、おねえちゃんの名前探す。

そうして、また、私はホールドボタンを押してみた。
繋がるわけではない。

けれど、今度こそ、繋がりたいと思った。
夢じゃなくて、確実に。

私は今、幸せだと、お姉ちゃんに伝えたかった。

インフルエンザ。(後書き)

季節は初夏ですが(笑)

春のインフルももう終わったよねえ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5613/>

哀ちゃん最良な短編集

2010年10月13日08時35分発行